原　著

福岡大学初のオリンピアン　岡本登の競技成績

──ヨミダス歴史館（読売新聞記事検索）からの検証──

柿山　哲治[1)]

The first Fukuoka University student to make the Olympians Noboru Okamoto's competition record

― Verification from Yomidas Rekishikan (Yomiuri Shimbun Article Search) ―

Tetsuji KAKIYAMA[1)]

Abstract

Noboru Okamoto is the first Fukuoka University graduate to have participated in the Olympic Games hammer throw event. In 1957, in his third year at Fukuoka University School of Commerce he took first place with his result of 54 meters 97 at the All Japan Athletics Championships. Moreover, during his 4th year at Fukuoka University, he finished with 58 meters 85 in the Kyushu student athletics event, setting a new record for Japan. In addition, he managed a record of 60.0 meters, which no Japanese had done before.

After graduating from Fukuoka University, he was hired by Asahi Kasei, and from the 1959 season onwards, he showed himself to be a leader in the field, extending the Japanese hammer throw record to 64 meters 02, and placing 13th with 60 meters 08 in the 1960 Rome-Olympic Games finals. After that, in 1961, he broke the Japanese record with his 66 meters 48, won the All-England Athletics Championships in 1962 and took the gold medal at the Asian Games held in Jakarta the same year with a new record for the tournament. At the Tokyo Olympic Games in 1964, he was eliminated during the qualifying event with his result of 61 meters 51 but would later taste victory in the Gifu nationals in 1965 with his 62 meters 34.

He also won the Japan Championships four times and the Kokutai (National Sports Festival) six times over a period of about 8 years, thus making a name for Japan in hammer throwing.

1）福岡大学スポーツ科学部
Faculty of Sports and Health Science, Fukuoka University

はじめに

福岡大学出身（含在学生）のオリンピック代表選手[3]は、2016（平成28）年8月に開催されたオリンピックリオデジャネイロ大会に、男子7人制ラグビーの日本代表主将として出場した桑水流祐策選手（以下、桑水流）を加えて12名になった。7人制ラグビーは、この大会からオリンピックの正式種目となり、メダル獲得も期待されたが、同年8月12日に行われた3位決定戦で南アフリカ代表に破れ、4位入賞で幕を閉じた。桑水流は同年9月7日に本学を訪問し、その時に寄贈された日本代表選手の公式ブレザーが、2017（平成29）年2月に竣工した総合体育館1階エントランスに展示されている。

福岡大学同窓会紙「有信　第143号」[4]には、「母校から五輪に初めて出場したのは、陸上ハンマー投げの岡本登（商34）さんだった。昭和三十五年のローマ大会（13位）、三十九年の東京大会に連続出場した。」と紹介されている。また、福岡大学五十年史[註1]別巻[5]には、「三十二年、岡本登は、日本選手権大会の陸上競技のハンマー投げにおいて、五十四メートル九七で優勝（『日本体育協会七十五年史から』）ついで、かれは、三十三年、第二十八回九州学生陸上競技対校選手権大会（5月18日・於鹿児島市）で五八メートル八五の日本新記録を出した。さらに同年の九月四日、日米対抗陸上競技横浜大会で、日本人ではじめて、六〇メートルを記録した。その後、旭化成に入社した岡本は、三十四年、日本選手権大会で、五九メートル一四を出して優勝、三十五年の日本選手権大会で、六四メートル〇二、三十六年の日本選手権大会では、六六メートル四八で、ともに優勝をかざった。もちろん、当時ハンマー投げの王者だったかれは、『三十五年のローマ、三十九年の東京両オリンピックに出場するなど数々の活躍をした。そして日本記録を六六メートル四八までにひきあげ、ハンマー投げの岡本時代を築いた』（陸上競技部資料）」と記載されている。しかし、2016（平成28）年のオリンピックリオデジャネイロ大会に合わせて開催された、「福岡大学オリンピアン記念展」＜同年7月6日～8月6日）では、岡本登氏（以下、岡本）に関する個別の出展は一切見られず、岡本が二度のオリンピック大会に出場した経緯を示す資料は、先述した別巻以外に本学では見当たらない現状にある。

一方、早稲田大学では、「早稲田スポーツ」は、常に時代の先頭を走るパイオニアとして社会的にも大きな注目を集め、多様な人材による活躍の積み重ね、当大学固有の魅力と校友を含めた一体感の醸成につながっていることから、大学のみならず、日本全体のスポーツの発展に寄与してきた早稲田スポーツの存在意義を改めて共有し、その比類なき個性を学内外へ広く発信するため、「早稲田スポーツミュージアム」を2019（平成31）年3月20日にオープンしている[11]。また、中京大学では、100名以上のオリンピアン・パラリンピアンを輩出していることもあり、木村吉次中京大学名誉教授（スポーツ史）が中心となってスポーツ博物館（仮称）準備室を開設（2004年4月、同大学体育学部教授会）し、中京大学のスポーツ国内外交流の足跡や同大学出身のオリンピック・パラリンピック選手の使用したスパイクシューズ等、様々な記念品や貴重なスポーツ歴史書及びオリンピック公式ポスター等も保管されてきた。そして、2018（平成30）年2月に竣工された豊田キャンパス新体育館には、「梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議」の主要事業の一つである、「学術とスポーツが融合し、スポーツ（身体文化）の多様な価値を未来に引き継ぐ場」として「中京大学スポーツ・ミュージアム」が2019（令和元）年に開館し、中京大学の競技実績やスポーツ史料を展示するのをはじめ、スポーツ科学体験ラボの設置、教育・研究に活用できるアーカイブスの構築によってコンテンツを充実させる構想がある[1]。

本学体育学部（現スポーツ科学部）は、1969（昭和44）年に創設し、2019（令和元）年に創設50周年を迎えた。中京大学体育学部（現スポーツ

科学部）は1959（昭和34）年に開設され[2]、本学より10年歴史が長いものの、本学にも将来的に同様のスポーツ・ミュージアム構想を鑑みた場合、オリンピアン・パラリンピアン数のみならず、先述した本学出身のオリンピック代表選手に関する史料蓄積においても十分とは言い難く、継続した選手育成と史料収集の積み重ねが必要不可欠と言える。

オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議[9]による「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて　最終報告」では、大学等におけるオリンピック・パラリンピック研究において、「オリンピック・パラリンピックの歴史や意義等に関する研究は、オリンピック・パラリンピック教育の充実に直接つながるものであり、大学等における研究の充実が求められる。また、トレーニングやコンディション、競技用具等に関する研究開発は、オリンピック・パラリンピックにおけるアスリートの活躍につながるものであり、アスリートの活躍やエピソード等は児童生徒にとって生きた題材となるものであることから、オリンピック・パラリンピック教育の充実の観点からも競技力向上に関する研究開発の推進が期待される。」としている。すなわち、オリンピックの史的財産（レガシー）の価値を高めるには、アスリートの活躍にエピソードを加え、広く記憶を蘇らせて、過去と現在、さらには未来につなぐ必要がある。したがって、本学のオリンピック・パラリンピック教育の礎を築くためには、歴史的視点から選手の活躍やエピソードを通してオリンピックそのものについて学び、チャレンジや努力を尊ぶ選手の態度を通してオリンピックを通じた学びができる教材の構築が必要と考えられる。すなわち、福岡大学のオリンピックの歴史は、岡本の“初”があって、先述した桑水流や、今後のオリンピアン・パラリンピアンの出現に繋がって行くものと思われる。

そこで本研究では、福岡大学出身者で最初にオリンピック出場を果たしたハンマー投げ選手の岡本に焦点をあて、彼の選手時代の競技成績を新聞記事から検証し、オリンピック出場までの経緯や出場した大会に纏わるエピソードを明らかにすることを目的とした。

方　法

福岡大学図書館所有のヨミダス歴史館（読売新聞記事検索）[註2]を用いて、「岡本登」をキーワードとして検索した。自動検出された新聞記事から岡本が出場した大会名、大会期日、大会記録、及び岡本に関する報道を年度別に整理した。また、自動検出されなかった大会記録や大会名については、再度キーワードを変えて検索し、検出された記事は本文中に新聞の発行日および形態を付して示した。

結　果

「岡本登」でキーワード検索すると、1958（昭和33）年5月19日～1965（昭和40）年10月26日の約8年間に渡り、スポーツ（114件）および西欧（2件）という分類で116件が自動検出され、内57件が写真を伴う記事[註3]であった。また、発行形態は朝刊99件、夕刊15件、号外2件であった。

検出された記事をもとに、主な成績について年度毎に、開催月日、大会名、場所、順位、記録、所属、備考、出典別に表1に示した。なお、備考欄に記載した日本新記録については、あくまで新聞で報じられたものであり、全てが公認記録規程[註4]によって認定されたものとは限らない場合もあり得ることを付記しておく。

表1. 岡本登選手の主な競技成績一覧

開催年	月日	大会名	場所	順位	記録	所属	備考	出典
1957（昭和32）年	10月6日	第41回日本陸上競技選手権大会	神戸王子陸上競技場	優勝	54m97	福岡大学		10月6日付朝刊
	11月24日	昭和32年度全日本選抜陸上競技大会	武蔵野市営陸上競技場	2位	56m08	福岡大学		11月25日付朝刊
1958（昭和33）年	5月18日	九州学生陸上競技大会	鹿児島市鴨池競技場	優勝	**58m85**	福岡大学	**日本新記録**	5月19日付朝刊
	7月4日	日本学生陸上競技連合創立30周年記念、天皇賜杯第27回日本学生陸上競技対校選手権大会兼日米陸上競技対抗選手選考競技会	国立競技場	優勝	57m05	福岡大学	大会新記録	7月5日付朝刊
	9月4日	日米交歓陸上競技横浜大会	三ツ沢競技場	優勝	**60m00**	福岡大学	**日本新記録**	9月5日付朝刊
	9月7日	日米対抗陸上競技第5戦京都大会	京都西京極競技場	優勝	57m74	福岡大学		9月8日付朝刊
	9月10日	日米対抗陸上競技第6戦福岡大会	平和台陸上競技場	優勝	58m70	福岡大学		9月11日付朝刊
	9月14日	日米対抗陸上競技最終戦小田原大会兼秩父宮賜杯第4回一般学生対抗陸上競技大会	小田原市城内競技場	優勝	57m09	福岡大学		9月15日付朝刊
	10月11日	第42回日本陸上競技選手権大会	国立競技場	2位	54m81	福岡大学		10月12日付朝刊
	10月22日	第13回国体秋季大会	富山市県営陸上競技場	優勝	57m54	福岡		10月22日付夕刊
1959（昭和34）年	5月24日	第7回全日本実業団対抗陸上競技	名古屋市瑞穂競技場	優勝	57m39	旭化成	大会新記録	5月25日付朝刊
	8月1日	第42回日本陸上競技選手権大会	国立競技場	優勝	59m14	旭化成		8月2日付朝刊
	10月4日	日独対抗陸上競技	国立競技場	優勝	**60m85**	旭化成	**日本新記録**	10月4日付夕刊
	10月11日	日独対抗陸上競技第2戦	大阪市立運動場	優勝	60m28	旭化成		10月12日付夕刊
	10月24日	日独対抗陸上競技小田原大会兼一般対学生陸上競技会	小田原市城内競技場	優勝	60m39	旭化成富士		10月24日付夕刊
	10月26日	第14回国民体育大会	国立競技場	優勝	**62m04**	静岡	**日本新記録**	10月26日付夕刊
	11月1日	昭和34年度全日本選抜陸上競技大会	国立競技場	優勝	**62m85**	静岡旭化成	**日本新記録**	11月2日付朝刊
1960（昭和35）年	4月17日	第10回みずほカーニバル陸上競技大会	名古屋瑞穂競技場	優勝	58m24	旭化成		4月18日付朝刊
	4月22日	第23回東京陸上競技選手権大会	中大グラウンド	優勝	60m20	旭化成	大会新記録	4月23日付朝刊
	4月30日	静岡陸上競技選手権大会	静岡県営草薙競技場	優勝	61m40	旭化成	大会新記録	5月1日付朝刊
	5月22日	第8回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会	国立競技場	優勝	62m58	旭化成	大会新記録	5月23日付朝刊
	7月2日	第44回日本陸上競技選手権大会	国立競技場	優勝	**64m02**	旭化成	**日本新記録**	7月3日付朝刊
	8月3日	ノルウェー対イタリアの国際陸上競技会	ビスレット・スタジアム（ノルウェー）	3位	59m80	旭化成		8月5日付朝刊
	8月16日	ケルンウェストハイム競技会	ケルン（西ドイツ）		62m85	旭化成		8月18日付朝刊
	9月2日	第17回オリンピックローマ大会	ローマ（イタリア）		61m95	日本	予選通過	9月3日付朝刊
	9月3日	第17回オリンピックローマ大会	ローマ（イタリア）	13位	60m08	日本		9月4日付朝刊
1961（昭和36）年	5月22日	第9回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会	八幡鞘ケ谷競技場	優勝	**64m06**	旭化成	**日本新記録**	5月22日付朝刊
	6月30日	第45回日本陸上選手権大会兼欧州派遣選手選考競技会	国立競技場	優勝	**66m48**	旭化成	**日本新記録**	7月1日付朝刊
	8月5日	ハルカワス国際競技会	ヘルシンキ（フィンランド）	優勝	65m78	旭化成		8月8日付朝刊
	8月11日	スウェーデン、フランス、日本三国対抗陸上競技大会	ストックホルム（スウェーデン）	4位	60m25	日本		8月13日付朝刊
	8月14日	日独親善陸上競技会	ルートウィッヒシャフェン（西ドイツ）	優勝	63m48	日本		8月16日付朝刊
	9月9日	日本ーギリシャ対抗陸上競技会	パン・アテネ・スタジアム（ギリシャ）	優勝	63m61	日本		9月10日付朝刊
	9月24日	秩父宮賜杯第一回実業団・学生対抗陸上競技大会	小田原市城山競技場	優勝	63m01	旭化成		9月25日付朝刊
1962（昭和37）年	5月6日	神奈川陸上選手権大会	藤沢市県営陸上競技場	優勝	64m64	旭化成	大会新記録	5月6日付夕刊
	6月16日	クソチンスキー記念陸上競技会	ワルシャワ（ポーランド）	3位	65m34	旭化成		6月17日付夕刊
	7月7日	ウェツラル市国際陸上競技	ウェツラル（西ドイツ）	優勝	64m55	日本		7月9日付朝刊
	7月13日	全英陸上選手権大会	ロンドン（イギリス）	優勝	62m19	日本		7月14日付夕刊
	8月27日	アジア大会日本代表	ジャカルタ（インドネシア）	優勝	63m88	日本	大会新記録	8月28日付朝刊
	10月24日	第17回国体秋季大会	岡山市県営陸上競技場	優勝	61m67	静岡・旭化成		10月24日付夕刊
1963（昭和38）年	5月4日	神奈川陸上競技選手権大会	藤沢市県営陸上競技場	優勝	61m67	旭化成		5月5日付朝刊
	6月9日	日本－スペイン対抗陸上競技会	マドリード（スペイン）	優勝	64m62	日本		6月11日付朝刊
	6月17日	カタロニア親善陸上	バルセロナ（スペイン）	2位	63m63	日本		6月18日付朝刊
	6月23日	日本－フィンランド対抗陸上競技会	サーリイエルビ（フィンランド）	2位	64m98	日本		6月25日付朝刊
	6月28日	日本－フィンランド対抗陸上競技会	チュカビンエ（フィンランド）	2位	64m25	日本		6月29日付朝刊
	7月3日	ズナメンスキー記念国際陸上大会	モスクワ（ソ連）	11位	61m19	日本		7月5日付朝刊
	7月5日	第3回ワールド・ゲーム国際陸上大会	ヘルシンキ（フィンランド）	5位	62m81	日本		7月7日付朝刊
	7月13日	全英陸上選手権大会	ロンドン（イギリス）	2位	62m52	日本		7月14日付朝刊
	9月7日	第6回東海陸上競技選手権大会	静岡県営草薙陸上競技場	優勝	62m77	静岡・旭化成	大会新記録	9月8日付朝刊
	9月29日	第16回全国勤労者陸上競技大会	小田原市城山競技場	優勝	62m88	静岡・旭化成	大会新記録	9月30日付朝刊
	10月5日	第1回東京五輪陸上競技出場標準記録に挑戦する第一回記録会	小田原市城山競技場	優勝	64m82	旭化成		10月6日付朝刊
1964（昭和39）年	6月7日	第19回国民体育大会秋季大会	新潟市県営陸上競技場	優勝	63m51	静岡・旭化成		6月7日付夕刊
	10月17日	第18回オリンピック東京大会	国立競技場	失格	61m51	日本	予選敗退	10月17日付夕刊
1965（昭和40）年	10月25日	第20回国民体育大会秋季大会	岐阜県営総合運動場	優勝	62m34	静岡		10月25日付夕刊

また、競技成績を含めた新聞記事の内容を年度別に以下に示す。

1）1958（昭和33）年の競技成績

岡本がクローズアップされた最初の新聞記事は、1958（昭和33）年5月19日付朝刊（図1）であった。それは、前日（5月18日）に鹿児島市鴨池競技場で開催された九州学生陸上競技大会における58メートル85の日本新記録[註5)]での優勝を報じる内容であった。

ハンマー投に日本新
福岡大の岡本58メートル85
【鹿児島発】十八日鹿児島市鴨池競技場で行われた九州学生陸上競技大会のハンマー投競技で岡本登（福岡大）は58㍍85の日本新記録を出した。公認日本記録は漆畑勝（日大）の58㍍31であるが今年漆畑選手は58㍍53を出している。

図1. 岡本が最初に出した日本新記録を報じる記事
＜読売新聞　1958（昭和33）年5月19日付朝刊＞

また、7月4日に開催された日本学生陸上競技連合創立30周年記念、天皇賜杯第27回日本学生陸上競技対校選手権大会兼日米陸上競技対抗選手選考競技会において、57メートル05の大会新記録で優勝していた（同月5日付朝刊）。同紙面には、「ハンマーに大会新　福岡大岡本優勝」の見出しと、「ハンマー投に大会新で優勝した岡本」と題した写真、「競技開始とともに雨が降りだし水たまりが出来るほどの悪コンディションであったが、期待のハンマー投で岡本登（福岡大）が今シーズン彼自身のだした58メートル85（日本新）には及ばなかったが、57メートル05の好記録をマークした。」と報じられていた。

さらに、9月4日に三ツ沢競技場で開催された日米交歓陸上競技横浜大会では2度目の日本記録更新とともに、日本人初の60.0メートル台に記録を伸ばしていた（同月5日朝刊）。その紙面には、「ハンマー初の60メートル　日米交歓陸上横浜大会　岡本、待望の日本新」の見出しと、「ハンマー投げに60メートルの日本新を出した岡本」と題した写真、「ハンマー投では期待の岡本登（日・福岡大）が一投目で60メートル0、二投目59メートル53、三投目59メートル40、五投目59メートル30、六投目59メートル12と六回の試技中五回にわたって漆畑勝（日大）の持つ日本記録58メートル31を破るとともに待望久しかった60メートルラインを征服する殊勲をたてた。」と評されていた。

10月11日に国立競技場で開催された第42回日本陸上競技選手権大会では、優勝は花村栄之進（中大・福島）55メートル37で、岡本は54メートル81の2位であったが、見出しは「岡本（ハンマー）花村に敗る」となっており、その紙面では「期待のハンマー投は今シーズン60メートル0の日本新を作った岡本登（福岡大・福岡）が新鋭花村栄之進（中大・福島）に敗れる番狂わせがあった。」と報じられていた。

しかし、同月22日に富山市県営陸上競技場で開催された第13回秋季国体において、岡本は57メートル54で優勝し、同日付夕刊には「一般男子ハンマー投で優勝の岡本（福岡）＝富山電送」と題した写真が掲載されていた。

2）1959（昭和34）年の競技成績

岡本は、5月24日に名古屋市瑞穂競技場で開催された第7回全日本実業団対抗陸上競技において、57メートル39の大会新記録で優勝し、翌25日付朝刊には「ハンマー投でも第一人者の岡本（旭化成）が57メートル39を投げて復調ぶりを示した。」と記載されていた。

また、8月1日に国立競技場で開催された第42回日本陸上競技選手権大会では、「岡本（ハンマー）が59メートル14」という見出しと「ハンマー投に本年度日本最高記録で優勝した岡本選手」と題した写真とともに、「ハンマー投でも日本記録保持者岡本（旭化成）が59メートル14の本年度日本最高記録を出した。」と報じられていた（8月2日付朝刊）。

さらに、10月4日に国立競技場で開催された日独対抗陸上競技において、60メートル85の日本記録を出し（同日夕刊）、同月11日に大阪市立運動場で開催された日独対抗陸上競技第2戦において、60メートル28と日本記録を更新し（同月12日付朝刊）、同月26日に国立競技場で開催された第14回国民体育大会において、62メートル04と再度日本記録を更新していた（同日付夕刊）。同紙面には、「ハンマー投に日本新を出した静岡岡本選手」と題した写真とともに、「国体だより」の欄に、「陸上競技のトップを飾るハンマー投で日本記録保持者岡本登（静岡・旭化成富士）は第三投目60メートル97、第五投目にはこれを大きく上回る62メートル04を投げ堂々日本新記録を樹立した。これまでの日本記録は昨年同選手の残した60メートルだが、今シーズンは日独対抗で60メートル85を出すなど、これが今シーズン四度目の記録更新。」と記載されていた。翌27日付朝刊の秋季国体における陸上評の欄には、「この日最大の殊勲者岡本は『日独対抗などで疲れていたので、優勝することだけを目標に気楽に投げたのが良かった』と大喜び。日本新記録と同時に待望のオリンピック標準記録62メートルを突破したのだから、ローマ行きがまず決まったようなもの。最初、腰がひけていたが、三投目60メートル97を出してからは見事な回転をみせた。62メートル04は今季の世界では二十四番目（十三か国の選手による）。岡本に残された課題は体重をつけ、ターンの速度を増すことと、サークルを最初から大きく使って四回目の力をこわさぬことである。」と評されていた。

10月31日付朝刊には、翌日から国立競技場で開催される1959（昭和34）年度全日本選抜陸上競技大会について、「ハンマー投げ岡本（旭化成）はもう60メートルラインを越すのが当然のような実力者になった。ターンのスピードがグッとついてきたことでもあり、日本新記録の樹立はほぼ確実。」と報じられていた。11月1日付夕刊では、「ハンマー投で日本記録保持者岡本登選手（旭化成）は第一投目から自己の持つ日本記録60メートル0を書きかえる奮闘ぶりであった。岡本選手の記録は一投目61メートル03、二投目61メートル90、三投目61メートル08、六投目には62メートル85という堂々たるものだった。」と記載されていた。

さらに、12月4日付朝刊には、読売新聞社制定の第9回「日本スポーツ賞」[註6)]の優秀選手6名の内の一人に推薦され、12月6日付朝刊には、「日本スポーツ賞候補の横顔」（図2）として写真とともに紹介されていた。読みにくいので紹介文を書写したのが図3である。

日本スポーツ賞
候補の横顔
陸上
岡本登(三)
成富士土木勤務▼身長一・八七▼
福岡大出、旭化
体重80キロ▼福岡県出身。
◇昭和三十一年九月の日本学生東西対抗ハンマー投に54メートル04を投げて優勝して以来、翌年の日本選手権に54メートル97、九州学生に58メートル65の日本新記録をたしていずれも優勝、この年の九月横浜で行なわれた日米対抗では待望の60メートルラインを突破する日本新記録をたして一位を占めた。本年に入っても各競技会で好成績を残したが、十月の国民体育大会では遂に62メートル65の日本新記録をたした。
◇指導者に恵まれぬ福岡大学在学中から猛練習を続け次々と好記録を残したが、ことしに入ってからは五回にわたって日本記録を更新、日本で初の60メートルライン突破に成功すると同時にローマ・オリンピック参加資格標準記録を越えた功績は大きい。その上この冬の間の練習次第では世界第一級のレベルまで到達することが可能であるし世界の強豪と肩をならべての活躍も大いに期待される。グラウンド・マナーはもとより広く日常生活でも他の社員の模範となる立派な勤務ぶりで今年度の陸上最優秀選手として名実ともにそなわった選手である。
日独陸上で活躍した岡本選手

図2. 日本スポーツ賞候補の横顔
＜1959（昭和34）年12月6日付　読売新聞朝刊＞

日本スポーツ賞候補の横顔

陸　上

岡本登（二二）
福岡大出、旭化成富士工場勤務▼身長1メートル77▼体重80キロ▼福岡県出身。
◇昭和三十二年九月の日本学生東西対抗ハンマー投に54メートル04を投げて優勝して以来、翌年の日本選手権に54メートル97、九州学生に58メートル85の日本新記録をだしていずれも優勝、この年の九月横浜で行われた日米対抗では待望の60メートルラインを突破する日本新記録をだして一位を占めた。本年に入って、各競技会で好成績を残したが、十月の国民体育大会ではついに62メートル85の日本新記録をだした。
◇指導者に恵まれぬ福岡大学在学中から猛練習を続け次々と好記録を残したが、ことしに入ってからは五回にわたって日本記録を更新、日本で初の60メートルライン突破に成功すると同時にローマ・オリンピック参加資格標準記録を越えた功績は大きい。その上この冬の間の練習次第では世界第一線級のレベルまで到達することが可能であるし世界の強豪と肩をならべての活躍も大いに期待される。グラウンド・マナーはもとよりだが、日常生活でも他の社員の模範となる立派な勤務ぶりで今年度の陸上最優秀選手として名実ともにそなわった選手である。

図3. 日本スポーツ賞候補の横顔の紹介文（著者による書写）

同月7日付朝刊には、日本陸上競技連盟（以下、日本陸連）がオリンピックローマ大会候補選手5人と強化選手45人を決定したことを報じ、岡本は候補選手5人の内の一人に挙げられていた。

3）1960（昭和35）年の競技成績

1月24日付朝刊には、日本陸連の定時代議委員会が1月23日に開かれ、オリンピック東京大会の選手強化委員長に織田幹雄氏[註7)]が就任し、1959（昭和34）年度の陸上競技最優秀選手として、岡本が岸記念賞[註8)]を受章したことが記載されていた。

4月15日付朝刊には、同月17日に名古屋瑞穂競技場で開催される第10回みずほカーニバル陸上競技大会について、「ハンマー投げの岡本（旭化成）の奮起が大いに期待される。殊に昨年62メートル85でオリンピック標準記録をしのいだ岡本は冬季練習で体重と実力をつけたといわれるから、日本記録を書きかえることも当然予測され、シーズン浅い現在であれば60メートルラインをこえるだけで収穫といっていい。」と報じられていたが、この大会は優勝したものの記録は58メートル24であった（同月18日付朝刊）。しかし、同月23日付朝刊に報じられた、中央大学グラウンドで開催された第23回東京陸上競技選手権大会では、「岡本、60メートル20の大会新」の見出しと、「ハンマー投げに60メートル20を出した岡本」と題した写真とともに、「岡本は五日まえのみずほカーニバル以来練習しておらず、ハンマー投げの期日が繰りあげとなったのを前日朝はじめて知ったという。ウォームアップでからだが重そうだったのもこのような事情からであろう。一投目59メートル80くらいを飛ばし、二投目はファウル、三投目60メートル20をだしたものだが、そのターンは巧妙ながらスピードがなかった。上体の回転に足がついてゆけなかったためである。しかし春から60メートルをこえたのはことしはじめてで、これで調子をあげてゆけば62メートル85の日本記録更新は楽だとみたい。」と評されていた。

さらに、同月30日に静岡県営草薙競技場で開催された静岡陸上競技選手権大会について、5月1日付朝刊には、「岡本ハンマーに61メートル40」（ママ）の見出しと「ハンマーに好記録を出した岡本選手＝静岡電送」と題した写真とともに、「ハンマー投げの第一人者岡本登選手（旭化成）は三投目61メートル40という自己の持つ62メートル85の日本新記録には及ばないまでも今季のベスト記録を残す活躍」と評されていた。同紙「こだ

ま」の欄には、岡本の投げた一投が棒高とびの砂場にとび込む珍事を受けて、「記録の進歩で競技場の作り方がなやまされる時代が来たよう。」とも綴られていた。

5月22日付朝刊には、国立競技場で開催される第8回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会を前に、「岡本の一発に期待」という見出しで、「ハンマー投げで岡本が62メートル85の自己のレコードを大きく破ることを望みたい。」と報じ、実際にオリンピック標準記録の62メートルを破る62メートル56の大会新を出して岡本は優勝していた（同月23日朝刊）。一方、同じ紙面には、岐阜市長良県営競技場で開催された第1回投てき記録会で、菅原武男（以下、菅原）（日大）が63メートル34の日本新記録を出し、「これまでの日本記録は昨年十一月に岡本登（旭化成）が残した62メートル85で、この日の63メートル34はメルボルン・オリンピックで優勝したコノリー（米）の63メートル19をもしのぐ好記録、今季の世界第八位である。」と報じていた。

しかし、7月3日付朝刊では、同月2日に国立競技場で開催されたオリンピック選手選考の第44回日本陸上選手権大会において、「岡本は64メートル02の日本新記録を樹立して二位菅原（60メートル11、以上大会新）とともにローマ行きを確実にした。」と記載され、同月4日付朝刊において、岡本・菅原の両選手がオリンピックローマ大会の陸上代表に決定したこと、読売新聞寄贈の最優秀選手賞が岡本に贈られたことが報じられていた。オリンピックローマ大会の前哨戦として8月3日、オスロ（ノルウェー）のビスレット・スタジアムで開催されたノルウェー対イタリアの国際陸上競技会に岡本と菅原も参加し、2位菅原（61メートル11）、3位岡本（59メートル80）の好記録を出した。また、同月16日にケルンウェストハイム（西ドイツ）の競技会に参加し、「岡本が63メートル35、菅原が63メートル10を投げ日本記録62メートル85（岡本登）を破った。」と報じられていた（同月18日付朝刊）。

9月2日付朝刊には、オリンピックローマ大会「第8日目の焦点」の欄に「ハンマー投げの岡本、菅原は堅くなりさえしなければ60メートルの予選通過記録は楽に出せるはずで、岡本が自己最高の64メートル02をもう3メートルのばせれば、入賞は堅い。この日一番期待できる種目だ。優勝は初の70メートル台をマークしたコノリー（アメリカ）であろう。」と報じられていた。

同月3日付朝刊には、「岡本は一投目をひっぱり過ぎて62メートル付近に投げながら惜しくもファウル。二投目はターンに失敗、最後の一投に61メートル95を出して予選を通過した。一方、菅原は鋭い踏み切りがカゲをひそめ、二投目の59メートル32に終わった。」と報じられていた。同月3日に号外が発行され、「岡本（ハンマー）予選パス」の見出しとともに、「ハンマー投げの岡本、61メートル95投げる（共同電送）」と題した写真が掲載されていた。

同月4日付朝刊および号外には、「岡本は13位に終わる　ハンマー投げ、決勝で60メートル08」という見出しと、「ハンマー投げ決勝で活躍の岡本選手」と題した写真とともに、「岡本は日本で出発前にみせていたような鋭いターンがかげをひそめまったく実力の片りんすらもみせなかった。一投目はファウルながら62メートルぐらいを出したものの、二投目は60メートル06、三投目はさらに悪く55メートルぐらいであっさり敗退してしまった。」と報じられていた。

日本陸連は四年後のオリンピック東京大会に備えて選手強化のため候補選手を選考し、11月21日に名前を発表し、岡本・菅原の両選手が第一候補者として選出されていた。

4）1961（昭和36）年の競技成績

4月28日に国立競技場で開催された第24回東京陸上競技選手権大会について、翌29日付朝刊には、「注目のハンマー投げは日本記録保持者岡本（旭化成）が二十九、三十両日の静岡選手権大会出場のため棄権して興味を半減させたが、オリンピック選手菅原（リッカー）が62メートル22の大会新記録をあげて気を吐き」「ハンマー投げの菅

原は五投目62メートル22を出して好調を裏づけた。この日は一投目ターンにスピードがつきすぎてむしろからだがひきまわされた感じだったが、二、三投目は三回転で60メートルを越え、調子をととのえ四投目から四回転に移っていた。五投目は比較的ゆっくりと余裕をもってターンにはいれたのが大会記録を破った原因。体重も80キロにふえているだけにことしの課題である四回転を完全に身につければ65メートルの国際線に達しよう。」と報じられていた。

一方、岡本は5月21日に八幡鞘ケ谷競技場で開催された、第9回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会で64メートル06の日本新記録をマークした。同月22日付朝刊には、「ハンマー投げの岡本は五投目、ひっぱりすぎて惜しくもファウルながら65メートル84を投げる好調ぶり。ターンの速度に対して足がついていけず、左にそれていたが、もう少し腰をさげてターンにはいり、中央で振りきれるようになれば世界の第一線級選手として活躍できよう。」と報じられていた。

また、6月30日に国立競技場で開催された第45回日本陸上競技選手権大会兼欧州派遣選手選考競技会において、岡本は六投目に66メートル48の堂々たる日本新記録を樹立した。翌7月1日付朝刊には、「岡本選手の記録は同選手が昨年残した64メートル02の日本記録および去る五月二十一日戸畑市で出した64メートル06をしのぐもので、本年度世界第三位（ローマ・オリンピック二位に匹敵）にはいる快記録である。」「岡本は三投目64メートル94、五投目64メートル25と日本記録を破ったあと六投目は馬力にまかせ引っぱりすぎた感もあったが、その一投はぐんとのびて向こう側のトラックにころがりでたほど。ターンを重ねるにつれて左へ傾く欠点もなく、まったく安定した試技だった。66メートル48以上をだしたのは全世界でもまだほかに十人しかいない。」と報じ、今夏ヨーロッパに遠征する実業団選手として菅原とともに選出されていた。

そのヨーロッパ遠征では、8月6日にハルカウス（フィンランド）の国際競技に出場し、岡本は65メートル78の日本新記録を出して1位となった。しかし、同月11日にストックホルム（スウェーデン）で開催された、スウェーデン、フランス、日本三国対抗陸上競技大会では、菅原が61メートル39の3位、岡本は60メートル25の4位でふるわなかった。また、同月14日にルートウィッヒシャフェン（西ドイツ）で行われた日独親善陸上競技会で岡本は63メートル48で1位、菅原は60メートル93で2位であった。さらに、9月9日にパン・アテネ・スタジアムで開催された日本ーギリシャ対抗陸上競技会においても、岡本は63メートル61で1位と圧勝していた。

9月24日に小田原市営城山競技場で開催された秩父宮賜杯第1回実業団・学生対抗陸上競技大会でも、岡本は63メートル01の記録で1位となり、同時に最優秀選手に選ばれていた（同月25日付朝刊）。

10月6日付朝刊の「秋の国体展望④」の陸上競技欄には、「世界的記録を期待されるハンマー投げの岡本登選手（静岡・旭化成）」と題した写真とともに、「フィールド一番の見どころはハンマー投げで66メートル48の世界的レコードをあげている岡本（静岡・旭化成）の一投。地元秋田の期待をになって菅原（秋田・リッカ―）もでることであり、ローマ・オリンピック優勝者ルデンコフ（ソ）との顔合わせをまえに、67メートル台に突入してほしいところ。」と報じられていた。

一方、10月8日付朝刊には、同月6日に開催されたソビエト陸上選手権大会において、ワシリー・ルデンコフ（オリンピックローマ大会優勝者）が68メートル95のソビエト新記録を出したと報じられていた。また、ルデンコフは11月2日に日ソ交歓陸上競技東京大会において、66メートル18の日本国際新記録[註9)]を出したことが同月3日付朝刊に記載されていた。この大会では2位菅原（リッカ―）59メートル88、3位川添（大昭和）58メートル70であったことが同紙面で確認できたが、岡本についての記載は見られなかった。しかし、12月3日付夕刊には、五輪強化本部白書の分析として、「ハンマー投げの岡本（旭化成）は技術的に

は世界の一級品だが、体重と記録に欠ける。」と報じられていた。

5）1962（昭和37）年の競技成績

3月5日付朝刊には、3月4日に日本陸連は定時代議委員会で、昨年度の勲功章[註10)]に岡本が決定したことが報じられていた。

また、4月26日付朝刊には、「ことしの陸上界期待と課題」の欄に、「岡本（ハンマー）は68メートル目標に」の見出しと「今季の活躍が期待されるハンマー投げの岡本（旭化成）」と題した写真とともに、「投てきでは、ハンマー投げの岡本（旭化成）がなんといってもオリンピックのホープ。去年より体重もついて88キロになった彼は『昨年より調子がいい。67－68メートルを目標に…』とたのもしく語っている。菅原（リッカ―）田中（日大）若林（中大）の充実をのぞみたい。」と記載されていた。

5月6日付夕刊にはその日に藤沢市県営陸上競技場で開催された神奈川陸上選手権大会において、岡本が64メートル60の大会新で優勝したことが報じられていた。また、その大会における第一日評として「ことし海外に派遣する選手の選考資料になるというので選手はもちろん、織田強化本部長はじめ強化委員会の首脳部も意気込んでいた大会第一日目も、前夜からの雨には勝てなかった。ただ一つの金星はハンマー投げで二投目64メートル60を投げ、六投のうち三度まで64メートルラインを越えた岡本（旭化成）であった。『一週間まえからカゼをひいて調子はよくない…』といいながらも、ターンにつれて上体が左に倒れていたこれまでの欠点が姿を消し、投げる方向も理想的だった。ことにターンの一回目になってきたあたり、課題の一つだった体重が88キロとふえてきたことと思い合わせると、今季の世界的な活躍を期待していいのではなかろうか。昨年残した66メートル48は年度世界第五位だったが、この日の調子から66－67メートルを実現する日も近くなっているようだ。」と記載されていた。

また、同月11日および6月11日付朝刊には、オリンピック選手強化の目的でポーランド、ソビエト、西ドイツなどヨーロッパ各地を転戦する陸上競技選手団に岡本が選出されたことが報じられていた。

6月16日にクソチンスキー（ポーランド）記念陸上競技大会において、岡本が65メートル34で3位になったことが同月17日付夕刊に報じられていた。また、岡本は7月7日にウェツラル市（西ドイツ）の国際陸上競技において64メートル55で優勝（同月9日付朝刊）、さらに同月13日にロンドンで開催された全英陸上選手権大会において、62メートル19で優勝していた（同月14日付夕刊）。そして、同月15日に日本陸連はアジア大会選考競技会終了後選考委員会を開き、ハンマー投げでは岡本と菅原が代表に決定していた（同月16日付朝刊）。

8月1日付朝刊では、アジア大会の「目標と焦点①」の「陸上競技」の欄に、「ハンマー投げの岡本（旭化成）の優勝は不動とみてよく」と報じられていた通り、同月27日にジャカルタ（インドネシア）で開催されたアジア競技大会において、63メートル88のアジア大会新記録で、岡本は金メダルを獲得していた（8月28日付朝刊）。

9月27日付朝刊には、10月7日に小田原で開催される実業団対学生兼国際親善競技大会、同月12日から大宮で開催される日本陸上選手権大会に参加する多彩な顔ぶれとして、「ハンマー投げは岡本選手（旭化成）の成長で、オリンピック有望種目となっているが、チボッキー（ママ）はその岡本に輪をかけて確実性のある選手。年齢こそ岡本と同じで二十五歳だが、からだは1メートル90センチ、体重90キロ。たしかにひとまわり大きい。最高記録はさる二十三日にだした70メートル42でコノリー（米）の70メートル67についで史上第二位である。七月八日ブダペストで69メートル34を投げたとき、六回の試技全部が66メートル以上だったというので欧州陸上界の話題になっている。」と報じられていた。

10月3日付朝刊には、日本陸上界の現状が掲載されており、「昨年久しぶりにハンマー投げの岡

本選手（旭化成）が66メートル48を投げ第五位にはいったというのが実情。」としながらも、今シーズン世界順位における岡本は65メートル34の12位であり、世界10傑からは脱落していた。しかし、同月24日に岡山で開催された秋季国体において、岡本は61メートル57で優勝していた（同日夕刊）。

12月9日付朝刊の「63年への期待④」の「陸上」の欄には、「ハンマー投げは第一人者岡本（旭化成）にのびなやみがあったものの、僚友菅原（リッカ―）が65メートル台に飛び込んだ。」と報じられていた。

6）1963（昭和38）年の競技成績

5月4日に藤沢市県営競技場で開催された、オリンピック東京大会候補強化選手30余人を招いた神奈川県陸上競技選手権大会において、岡本は笠原（東急）を押さえて1位ではあったが、「ハンマー投げの岡本は振り切りがまだ本調子でなく、四投目の61メートル67が最高。」（同月5日付朝刊）と報じられていた。

6月9日にマドリード（スペイン）で開催された、日本ースペイン対抗陸上競技会において、岡本が64メートル62で1位、菅原が61メートル05で2位であった（同月11日付朝刊）。しかしながら、同月17日にバルセロナ（スペイン）で開催された日本陸上チームとカタロニア選抜の親善陸上大会において、菅原が63メートル86で1位、岡本は63メートル63で2位（6月18日付朝刊）であった。また、同月23日にサーリイエルビ（フィンランド）で開催された、日本対フィンランドの陸上競技大会では、菅原が65メートル30で1位、岡本が64メートル98で2位（6月25日付朝刊）であった。さらに、同月27日にチュビンカエ（フィンランド）で競技会に出場し、菅原が67メートル73の日本新記録で1位、岡本は64メートル25で2位であった。同月29日付朝刊には、「菅原選手の記録は本年度世界第三位の快記録で、これまで岡本登選手（旭化成）のもっていた66メートル48（36年）を更新したわけ。なお菅原選手の記録は世界ハンマー投げ史上でも第八位というりっぱなものである。」「菅原選手は昨年まで第一人者岡本のカゲにかくれた存在であったが、今シーズンはきわめて好調で得意の四回転ターンに鋭さを加えていた。まだ体重が軽いのが難点だが、技術的には岡本とともに国際水準にあるといわれていた。日大出身でリッカ―ミシン勤務、身長1メートル74、体重78キロ。これまでの最高記録は65メートル85だった。」と報じられていた。

7月3日にモスクワ（ソ連）で開催されたズナメンスキー記念国際陸上大会において、菅原は63メートル29で9位、岡本は61メートル19で11位であった（同月5日付朝刊）。また、同月5日にヘルシンキで開催された第3回ワールド・ゲーム国際陸上大会において、菅原が64メートル01で4位、岡本が62メートル81で5位であった（同月7日付朝刊）。さらに、同月12日にホワイト・シチー・スタジアム（イギリス）で開催された全英陸上選手権大会において、菅原は65メートル56で優勝、岡本は62メートル52で2位であった。同月14日付朝刊には、「ハンマー投げははげしい雨の中で行われたが、菅原武男選手（リッカ―）は65メートル56を投げて優勝、岡本登選手（旭化成）も62メートル52で第二位にはいった。菅原選手の記録はイギリス記録を61センチ破ったもの。」と報じられていた。

9月8日に静岡市県営草薙陸上競技場で開催された第6回東海陸上競技選手権大会において、岡本は62メートル77の大会新記録をマークした（同月8日付朝刊）。また、同月29日に小田原市城山競技場で開催された第16回全国勤労者陸上競技大会においても62メートル88の大会新記録で岡本が優勝していた（9月30日付朝刊）。さらに、10月5日に小田原市城山競技場で開催された、東京五輪の陸上競技出場標準記録に挑戦する第1回大会記録会では、岡本が64メートル82、菅原が64メートル31で、同月6日付朝刊には、「ハンマー投げの岡本、菅原は楽に64メートルを投げて軽く標準記録をオーバーした」と報じられていた。

同月13日付朝刊には、当日開催される東京国際

スポーツ大会[註11)] 陸上について、「きょうの見どころ」の欄で、「岡本の一発に期待」という見出しとともに、「ハンマー投げが一番の見もの。世界記録（70メートル67）保持者コノリー（アメリカ）実力ナンバー・ワンのチボツキー（ハンガリー）新鋭コンドラショフ（ソ連）の外人トリオにたいする日本のホープ岡本（旭化成）菅原（リッカ―）の挑戦である。菅原はいま腰を痛めているので岡本の一発を期待したい。東京オリンピックの入賞が可能な種目だが、こんどの成績いかんではさらに自信をつけることができるだろう。」と報じられていた。しかし、翌日（同月14日付）の朝刊には、「菅原（ハンマー）の健闘光る」という見出しとともに、「この日、五分以上に対抗できたのはハンマー投げだけだった。チボツキー（ハンガリー）コノリー（アメリカ）コンドラショフ（ソ連）の巨漢トリオが豪快なターンを見せていたものの、記録的には期待はずれ。一、二回目ファウルをしたコンドラショフが五回目うまくひっかけて優勝をさらった。このなかで未公認日本最高（67メートル73）をもつ菅原（リッカ―）が世界記録をもつコノリーを抜いて二位にくいこんだのはりっぱだ。『腰を痛めているので思い切ってフィニッシュができない』そうだが来年の本大会での上位入賞の期待を深めた。」と報じられていた。なお、その紙面には岡本の成績に関する情報は一切見られなかった。

10月23日付朝刊には、同月27日から開催される山口国体について、「ハンマー投げの岡本（静岡、旭化成）菅原（東京、リッカー）には68メートルに迫る一投を望みたい。とくに、ハンマー投げはこんどの国際スポーツ大会でオリンピック上位入賞の希望もでてきた。」と報じられていた。同月30日付朝刊に山口国体におけるハンマー投げの結果が掲載されており、菅原が64メートル48の大会新記録で優勝し、岡本は63メートル04で2位であった。

7）1964（昭和39）年の競技成績

岡本は6月7日に新潟県で開催された第19回国民体育大会において、63メートル51で優勝し、その日の夕刊では、「岡本が63メートル51ハンマー」の見出しを飾っていた。

7月1日付朝刊には、「五輪代表の座をかけて3日から日本陸上選手権」の見出しで、「ハンマー投げでやっと調子をとりもどした菅原に、岡本、若林、笠原を加えた、スケールの大きい投げあいが注目される。」と報じられていた。同月4日付朝刊には、「ハンマー投げで63メートル64を投げ、標準記録を突破した菅原選手（リッカ―）の一投」と題した写真とともに、「ハンマー投げで菅原武男（リッカ―）がオリンピック標準記録（63メートル）を越える63メートル64を投げた。なお菅原選手が標準記録を越えたのは今季五回目。」と報じられていた。一方、岡本は2位で記録は62メートル54であった。

同月6日にオリンピック東京大会における陸上の日本代表選手32人が発表され、菅原とともに岡本も選出され、顔写真とともに当時のプロフィール「岡本登（おかもと・のぼる）27歳、福岡、福岡大、旭化成、1メートル78、90キロ、ハンマー投げ66メートル48。」が翌7日付朝刊に掲載されていた。

7月17日付朝刊、「20競技」の「ラスト・スパート⑤」の「陸上」の欄には、「現実的な投てき陣」の見出しとともに、「入賞の期待はハンマー投げの菅原（リッカ―）と岡本（旭化成）だけ。それも、いまのままでは勝てたら奇跡。だから、この二人をなんとかするには現実的にならざるをえない。“本番”の会場は、東京なんだから、練習も東京の中心。オリンピックの日程で、ハンマーの予選は、午前中だから、練習も午前中心。予選をとおらないことには話にならん…」と報じられていた。また、8月10日付朝刊では、「東京オリンピックの日本選手団主将に、体操代表の小野喬選手[註12)]（三二）（東京、東レ）をきめる。また、旗手についても具体的に検討する予定である。」と報じられ、その記事の中で、「旗手については競技の成績、経験というよりは、むしろ見ばえのする選手を選ぶという意向が強く、

からだの大きい、力のある選手が選ばれる予定だが、いまのところ陸上競技から選ばれる線が濃い。旗手が陸上の選手からきまった場合は、ローマ大会についで二度目の出場の岡本登選手（ハンマー投げ、静岡旭化成）また金子宗平（円盤投げ、東京リッカー）が代表選手にはいったときは、この両選手のうちどちらかが選ばれるものとみられている。」と記載されていた。

10月17日付夕刊では、当日国立競技場で開催された第18回オリンピック東京大会の陸上競技について報じ、「期待のハンマー投げ　菅原、軽く予選パス　非力の日本勢で気吐く」の見出しとともに、「ハンマー投げは、好調を伝えられているハンガリーのジポツギーが、すごいスピードの三回転ターンで、67メートル99のオリンピック新記録をマークした。世界記録保持者のコノリ（アメリカ）も豪快な一投で67メートル40のオリンピック新記録を出した。また、クリム（ソ連）ニクリン（同）エックシュミート（ハンガリー）ら強豪選手も、ゆうゆうと、たった一回で予選記録の63メートルをオーバー、貫録を示した。日本選手は、菅原武男がするどいターンを見せて軽く一投目に63メートル84を投げ、決勝出場資格を得たが、岡本登（61メートル51）、笠原章平（61メートル87）の二人は、まったくぎこちなく、スピードのない鈍い振りで、あっさり予選で敗退した。日本選手はどの種目でも、毎日同じような失敗を繰り返している。」と報じていた。なお、翌18日の決勝で菅原は13位（63メートル69）で、またしても日本人の入賞はならなかった。10月19日付朝刊には、「日本期待の菅原の調子は、悪くなかった。一投目から思い切りよく勝負に出たが、足をすべらせて、惜しくもファウル。これがひびいて二、三回目は肩に力がはいり、ターンにも日ごろのスピードが見られなかった。」と報じられていた。なお、クリム（ソ連）が69メートル74のオリンピック大会新記録で優勝し、2位のジボツギー（ハンガリー）も69メートル09のオリンピック大会新記録であった。

8）1965（昭和40）年の競技成績

10月25日付朝刊には第20回国体秋季大会の熱戦の展開が報じられ、「一般男子ハンマー投げには東京オリンピック代表の菅原武男（東京）、岡本登（静岡）の両選手をはじめ、ユニバーシアードで活躍した木下紘一（京都）らが出場する。」と記載されていた。同日夕刊には、「ハンマー投げ岡本（静岡）に栄冠」の見出しとともに、「一般男子ハンマー投げ決勝では岡本登選手（静岡）が、菅原選手（東京）を押さえて優勝した。」と報じられていた。岡本の記録は62メートル34、菅原は61メートル34であった。

考　察

岡本は福岡大学初のオリンピック出場選手でありながら、彼の生い立ちやハンマー投げ選手になった経緯を示す資料は、大学には一切残されていない。2010（平成22）年2月25日に刊行された「広報かんだ（NO.1234）」[註13)]に、元祖・苅田町出身五輪選手として、岡本が紹介されていた（図4）。苅田町役場に問い合わせたが、「当時の担当者がいなくなり、特に苅田町内で岡本を顕彰してはいない。」と言われ、岡本に関する情報を求めると、後日、「福岡県立京都高等学校出身である。」との回答のみ得ることができた。早速、京都高等学校へも問い合わせてみたが、教頭先生が電話で応じられたものの、岡本に関して顕彰するものはなく、当校の卒業生に五輪選手がいたことすら初耳と驚いた様子であった。

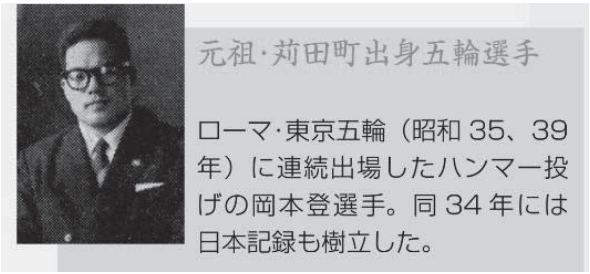

図4. 数字で見る苅田町55年（広報　かんだ No. 1234）
＜2010（平成22）年2月25日刊行＞

現時点で、岡本がいつ、どこで、どのようにしてハンマー投げを始めたのかは明らかにできないが、1957（昭和32）年10月5日、福岡大学商学部3年次に神戸王子競技場で開催された、第41回全日本陸上競技選手権において54メートル97で初優勝していた（同月6日付朝刊）。その前年大会でのハンマー投げ優勝記録は、小島義雄（以下、小島）（川崎重工）の57メートル40 であり、前年記録を下回っていたためか、記録の掲載以外、その紙面上で岡本の優勝を評する記述はみられなかった。しかし、この大会は、同年6月9日に開催された北海道諸加盟団体対抗陸上競技会で57メートル60の日本記録を更新した小笠原孝美（同大会2位、54メートル18）、前年度覇者の小島（同大会3位、53メートル15）を破っての勝利であった。そして、岡本はこの大会での優勝により、同年11月24日に武蔵野市営競技場で開催された昭和32年度全日本選抜陸上競技大会[註14)] に招待されることになる。同月9日付朝刊には、この大会の招待選手名と記録が紹介されているが、岡本の記録（54メートル97）は招待選手の5番目に位置していた[註15)]。この大会は翌年の1958（昭和33）年に、東京で開催される第三回アジア競技大会の選考を兼ねたものでもあった。同月22日付朝刊には、「期待のハンマー投」の見出しとともに、「大会の見どころに焦点を合わせてみると、男子はまずハンマー投に日本新記録が予想される。今季日本記録を書きかえた小笠原（北海道電通）飯塚（大塚ク）と新進漆畑（日大）ら三人の57メートル台選手が豪快な一投で58メートルをねらう争いは、安岡（大昭和）花村（中大）を加えて非常な興味を呼んでおり、武蔵競技場が不思議にこれまで好記録が生れたふんい気をもつ場所だけに意外な大記録がでるのではないかとの声もある。」と報じられていたものの、岡本に関する記述は一切見られなかった。しかし、大方の予想に反し、岡本は56メートル08で2位となり、優勝は漆畑が日本新記録の58メートル31、3位が花村（中大）で55メートル85[註16)] であった（同月25日付朝刊）。

岡本は、福岡大学4年次の九州学生陸上競技大会において、58メートル85の日本新記録で優勝した。この記録は、前年度全日本選抜陸上競技大会で岡本が破れた漆畑（58メートル31）の記録を更新したものであった。日本新記録で優勝したことにより、岡本は一躍注目の選手となり、この大会を境に、岡本は陸上競技大会が開催される度に新聞紙面に取り上げられることが多くなっていった。そして、岡本はその期待に応えるように、日本人が誰も達しえなかった60.0メートルへと日本記録を在学中に更新していた。

福岡大学卒業後、岡本は旭化成に入社して練習拠点を静岡に移していた。1959（昭和34）年のシーズンにはハンマー投げの第一人者として報じられる存在になり、出場する大会では全て優勝、日本記録をこの年だけで4度更新し、62メートル85まで伸ばしていた。この功績が認められ、第九回「日本スポーツ賞」の優秀選手6名の候補者にも選出されたものの受賞には至らなかった。しかし、「日本スポーツ賞候補の横顔」の中には、「指導者に恵まれぬ福岡大学在学中から猛練習を続け次々と好記録を残した」「グラウンド・マナーはもとよりだが、日常生活でも他の社員の模範となる立派な勤務ぶりで今年度の陸上最優秀選手として名実ともにそなわった選手」と評されていることから、福岡大学在学時においては必ずしも恵まれた環境とは言えない中でも、苦労と努力で栄冠を勝ち取り、選手としてはもちろん、人としても周りから尊敬される人柄の持ち主であった様子が窺えた。なお、この年度の陸上競技最優秀選手として、岡本は岸記念賞を受章し、日本陸連から、翌年に開催されるオリンピックローマ大会候補選手5人の内の一人として早々と選出されていた。

オリンピックローマ大会の開催年である1960（昭和35）年に入っても岡本の快進撃は続き、出場する大会では大会新記録で優勝を重ねていた。その一方で、菅原（日大）が63メートル34の日本新記録を出し、岡本のライバルとして頭角を現し始める。しかし、7月にオリンピックローマ大会

選手選考会を兼ねた日本陸上選手権大会では、岡本が64メートル02の日本新記録を樹立して優勝し、2位の菅原とともにオリンピックローマ大会代表選手に決定していた。また、オリンピックローマ大会までの競技会では、両選手ともヨーロッパを転戦しながら鎬を削っていた。そして、オリンピックローマ大会当日の新聞＜1960（昭和35）年9月2日付朝刊）＞において、「岡本が自己最高の64メートル02をもう3メートルのばせれば、入賞は堅い。この日の一番期待できる種目だ。」と評されているように、菅原より岡本の方がハンマー投げの第一人者であり、陸上競技の中でも入賞が期待されている様子が窺えた。そして、岡本は三投目に61メートル95を出して予選を通過したが、菅原は59メートル32で予選落ちとなった。しかし、決勝での岡本は60メートル08で13位に終わり、入賞することはできなかった。それでも、オリンピックローマ大会直後の11月には、日本陸連は4年後のオリンピック東京大会に備えて選手強化のため候補選手として、岡本・菅原の両選手を第一候補者として選出していた。

岡本は、1961（昭和36）年の5月全日本実業団対抗陸上競技選手権大会で64メートル06、6月の日本陸上競技選手権大会兼欧州派遣選手選考競技会では66メートル48と立て続けに日本記録を更新し、その記録は「本年度世界第三位（ローマ・オリンピック二位に匹敵）にはいる快記録」と報じられ、入賞からメダル獲得へと期待が高まっていた。

1962（昭和37）年には、岡本は「68メートルを目標に」と期待されるとともに、7月にロンドン（イギリス）で開催された全英陸上選手権大会において62メートル19で優勝、8月にジャカルタ（インドネシア）で開催されたアジア大会には菅原とともに出場し、63メートル88のアジア大会新記録で金メダルを獲得し、国際大会での活躍にも目を見張るものがあった。しかしながら、そのシーズンの10月には、世界順位における岡本の65メートル34は12位となって世界10傑から脱落し、新聞紙面では「ハンマー投げは第一人者岡本にのびなやみがあった」と報じる一方で、「僚友菅原が65メートル台に飛び込んだ。」と報じ、岡本の低調とは対照的に菅原の好調ぶりを伝える記事も見られるようになっていた。

1963（昭和38）年に入っても、岡本と菅原の僚友はトップ争いを続けていたが、6月のチュビンカエ（フィンランド）での競技会において、菅原が67メートル73の日本新記録で1位（岡本は64メートル25で2位）となり、同時にこの年度世界3位、世界ハンマー投げ史上8位の記録を打ち出し、「菅原選手は昨年まで第一人者岡本のカゲにかくれた存在であったが、今シーズンはきわめて好調で得意の四回転ターンに鋭さを加えていた。」と報じられていた。この大会以降も、岡本と菅原の激しいデッドヒートは続き、7月の全英陸上選手権大会では、菅原が65メートル56で優勝、岡本は62メートル52で2位であった。岡本は9月の東海陸上競技選手権大会で62メートル77の大会新記録、全国勤労者陸上競技大会においても62メートル88の大会新記録で優勝を勝ち取り、10月に開催されたオリンピック東京大会の陸上競技出場標準記録に挑戦する第1回大会記録会では、岡本、菅原の両者共に64メートル台を投げて、標準記録を軽くオーバーしていた。オリンピック東京大会のプレ大会として位置づけられた東京国際スポーツ大会前には、菅原が腰を痛めていたため、「岡本の一発に期待したい」という見出しとともに、オリンピック東京大会の入賞が可能な種目としても期待されていた。しかし、その大会では、菅原が当時の世界記録保持者コノリーを抜いて2位に食い込み、菅原を賞賛する報道のみが目立ち、岡本の成績に関する情報は一切報じられていなかった。また、10月に開催された山口国体でも、岡本と菅原に68メートルに迫る記録更新が期待されていたが、菅原が64メートル48の大会新記録で優勝し、岡本は63メートル04で2位に甘んじていた。

オリンピック東京大会開催年の1964（昭和39）年6月に開催された新潟国体において、岡本は63メートル51で優勝を勝ち取っていた。しかし、オ

リンピック東京大会代表の座をかけて7月に開催された日本陸上選手権では、菅原が今季5回目となるオリンピック標準記録（63メートル）越えの63メートル64を投げて優勝し、岡本は2位となるも、標準記録には及ばす62メートル54であった。それでも、オリンピック東京大会の日本代表選手に、菅原と共に岡本も選出された。しかし、事前の報道では、岡本と菅原両者共に入賞の期待をされながらも、「いまのままでは勝てたら奇跡」とも報じられていた。岡本は、オリンピック東京大会の旗手候補にも名前が挙がっていたが、実際には選出されなかった[註17)]。そして迎えたオリンピック東京大会において、菅原は一投目に63メートル84を投げて決勝進出を果たすも、岡本は61メートル51であっさり予選敗退していた。菅原は前回出場したオリンピックローマ大会で予選敗退した雪辱を果たし、決勝にコマを進めたものの、63メートル69で13位にとどまっていた。

オリンピック東京大会翌年の1965（昭和40）年10月に開催された岐阜国体には、菅原と岡本が出場し、岡本は菅原を押さえて優勝していた。岡本の記録は62メートル34、菅原は61メートル34であった。これ以降、岡本の大会出場を報じる記事は検出されなかった。そのため、岡本がこの大会を最後に引退したのか否かを本研究で明らかにすることはできなかった。

一方、菅原は1968（昭和43）年のオリンピックメキシコシティー大会、1972（昭和47）年のオリンピックミュンヘン大会と4大会連続でオリンピックに出場し、オリンピックメキシコシティー大会では岡本が成し得なかった日本選手団主将を務め、4位入賞（69メートル78 / 3位と同記録。2番目の記録により4位となる。）を果たしていた。そして、菅原以降の日本記録の更新は、岡本と菅原の四回転投法を参考[7)]にしたアジアの鉄人こと室伏重信[註18)]に引き継がれ[8)]、日本ハンマー投げ悲願であった2004（平成16）年のオリンピックアテネ大会における室伏広治[註19)]の金メダル獲得につながって行ったものと思われる（表2）。

まとめ

岡本は、1957（昭和32）年の福岡大学商学部3年次に日本選手権で優勝、1958（昭和33）年の4年次で日本新記録を樹立し、在学時には60メートル台に記録を伸ばしていた。卒業後は旭化成に所属し、1960（昭和35）年のオリンピックローマ大会と1964（昭和39）年のオリンピック東京大会に、ハンマー投げ第一人者として連続出場していた。オリンピック大会でのメダル獲得、入賞は果たせなかったものの、日本記録を幾度も塗り替え、日本記録保持者でなくなった後も、日本記録保持者の菅原と切磋琢磨して、日本陸上界を牽引していた。岡本の8年に及ぶハンマー投げ選手としての活躍は、新聞記事に取り上げられた競技成績のみからも、本学初のオリンピアンとして語り継ぐべきエピソードが数多く存在し、本学のオリンピック・パラリンピック教育の重要な史的財産になり得る可能性が示唆された。

前述した早稲田大学スポーツミュージアムでは、長い歴史を彩る栄光のシーンや象徴的なエピソード等を通じて、早稲田らしさと誇りを体感できるよう、実際に競技で使用した貴重なユニフォーム等を展示する他、写真や映像コンテンツを豊富に配置されており、検索システムとして「早稲田スポーツ名鑑」を用意し、過去から現在の早稲田スポーツに係わる関係者達の検索が可能で、体育各部（44部）の資料を交替で展示するコーナーもあり、足を運ぶ度に新たな発見があるような工夫が随所に凝らされている[12)]。また、中京大学スポーツ・ミュージアムでは、スポーツ史料の収集・保存・展示は、学芸員養成課程の先端的な実習の場となり、研究に関しては、スポーツ科学の成果だけでなく、11学部を擁する総合大学として学際的に研究に取り組み、スポーツに関わる文化的な国際ネットワークの拠点を目指している。さらに、スポーツに関わる企業との共同研究の成果を広く社会一般に発信する拠点とし、世界でもスポーツ分野では類がない試みがなされ、展示技術の開発に関しては、工学部が仮想化（デ

表2. ハンマー投げ日本記録の変遷＜1961（昭和36）～2003（平成15）年＞

西暦（和暦）年	選手名	記録（m）
1961（昭和 36）	岡本　登	66.48
1963（昭和 38）	菅原武男	67.73
1968（昭和 43）	菅原武男	67.90
	菅原武男	68.94
	菅原武男	69.02
	菅原武男	69.78
1971（昭和 46）	室伏重信	70.18
	室伏重信	70.40
	室伏重信	71.14
1981（昭和 56）	室伏重信	71.36
	室伏重信	71.72
1982（昭和 57）	室伏重信	72.88
	室伏重信	73.92
	室伏重信	75.20
1984（昭和 59）	室伏重信	75.74
	室伏重信	75.96
1998（平成 10）	室伏広治	76.65
	室伏広治	76.67
	室伏広治	77.35
	室伏広治	78.41
	室伏広治	78.57
1999（平成 11）	室伏広治	79.17
2000（平成 12）	室伏広治	80.23
	室伏広治	80.56
	室伏広治	81.08
2001（平成 13）	室伏広治	82.23
	室伏広治	82.60
	室伏広治	83.47
2003（平成 15）	室伏広治	84.86

日刊スポーツ（2018）[7] を一部改変

ジタル化）に取り組んでいる[10]。したがって、福岡大学独自のオリンピック・パラリンピック教育の構築には、本研究のような人物に焦点をあてた研究の蓄積はもちろん、スポーツ科学部を拠点とした全学的なネットワークを形成し、情報の集約と発信がスムーズに行え、オリンピック・レガシーの価値を高める仕組みづくりが必要不可欠と思われる。

付記

本研究の一部は、2017（平成29）年の九州体育・スポーツ学会第66回大会（福岡大学）において発表した。

註

註1）福岡大学創立五十周年の記念行事として1986（昭和60年）3月に刊行され、1988（昭和62）年9月30日に上巻（1,252ページ）、11月15日に下巻835ページ、11月30日に別巻（708ページ）、これらの続編として12月20日に年表・資料集（543ページ）が発行されている。別巻には学友会および体育部会についても収録されている。

註2）明治7（1874）年の創刊号から最新号まで1,000万件以上の記事が検索・閲覧できる、日本で初めてのオンライン・データベース。キーワード1つで135年の激動の歴史を読み取ることができ、近・現代史の研究や世相の移り変わり、日本語の変遷などを探るのに便利。

註3）岡本登の記事とともに写真が掲載されているものを含むため、全てが岡本のみを被写体として撮影されたものとは限らない。

註4）日本記録の公認については、日本陸上競技連盟の陸上競技ルールブックにおいて、公認記録規程が定められている。

註5）それまでの日本記録は、1957（昭和32）年11月24日に武蔵野市営競技場で開催された、昭和32年度全日本選抜陸上競技大会において、漆畑勝（日本大学）が作った58メートル31であり、岡本は56メートル08の2位であった。漆畑は1958（昭和33）年のシーズンで58メートル53と記録を更新しており、年内での60メートルの関門突破が期待されていた（読売新聞1957年11月25日付朝刊）。

註6）1951（昭和26）年に読売新聞社で制定、毎年アマチュア・スポーツ34団体から推薦された優秀選手ならびに団体（チーム）のうちから「日本スポーツ賞委員会」により慎重な選考を行い、日本アマ・スポーツ界最高の選手もしくはチームを選び「日本スポーツ賞受賞者」を決定する。受賞者には笠置季男氏（二科会）作の記念トロフィー、その所属する競技団体へは奨励金、また競技別優秀選手、チーム全部には記念品と賞状を贈呈してその栄誉を表彰する。

註7）1924（大正13）年のオリンピックパリ大会で三段跳び 6位入賞、1928（昭和3）年のオリンピックアムステルダム大会に出場し、同種目で優勝、日本人初のオリンピック金メダリストになった。1932年のオリンピックロサンゼルス大会と合わせてオリンピック 3大会連続出場。1964（昭和39）年のオリンピック東京大会では陸上競技チーム総監督を務めた。

註8）「日本陸上競技連盟が故岸清一博（前体協会長・IOC委員）の陸上競技界に遺した功績を顕揚記念するために毎年一回その年度に活躍した競技者の中から技術、人格ともに優秀にして競技者精神を堅持し全国競技者の範たる選手を選んで授興する」（1939年4月11日付朝刊）。

註9）訪日外人選手による最高記録。

註10）日本陸上競技界に功労、功績を残した競技者、指導者に授与される。オリンピック及び世界陸上競技選手権大会入賞者またはアジア競技大会、ユニバーシアード及び世界ジュニア陸上競技選手権大会の金メダリストが対象となる。

註11）1964（昭和39）年のオリンピック東京大会の前年に大会組織委員会が競技の運営に万全を期すため、諸外国に呼びかけて開いたプレオリンピック。1963（昭和38）年10月11日～16日に開催された。

註12）オリンピックヘルシンキ大会以来、メルボ

ルン、ローマ、東京とオリンピック4回連続出場の経験を持ち、メルボルン、ローマ両大会では個人総合の2位のベテラン。しかも、東京オリンピックでの上位入賞も確実とみられているので、最適任といえると評されていた。

註13）福岡県京都郡苅田町役場から発行されている広報誌。この号は創刊から1234号を記念して「数字で見る苅田町55年」と題して特集が組まれ、岡本については「あの頃のあんな事こんな事」の中に掲載されていた。

註14）日本陸上競技連盟と読売新聞社が1928（昭和13）年以来、わが国陸上競技界最高の東西対抗競技会として開催されていたが、1955（昭和30）年より、そのシーズンの全日本ランキングから上位選手のみを招待し、「全日本選抜陸上競技大会」と改称された（1955年11月5日付朝刊）。

註15）飯塚祥人（大塚AC）57メートル70、小笠原孝美（電通）57メートル60、漆畑勝（日大）57メートル04、安岡誠晃（大昭和）55メートル18と岡本を含めた5名がハンマー投げで招待されていた（1957年11月9日付朝刊）。

註16）1957（昭和32）年11月20日付朝刊で、この大会のハンマー投げに花村栄之進（中大）と野村義根（法大）の二人が追加され、小島（川重）が不参加となったことが報じられていた。

註17）1964（昭和39）年のオリンピック東京大会日本代表選手団の旗手は、競泳選手の福井誠氏であった。1960（昭和35）年のオリンピックローマ大会では競泳男子800m自由形リレー銀メダルを獲得、1964年のオリンピック東京大会でも800m自由形リレーのメンバーとして銅メダルを獲得している。

註18）ハンマー投げで日本選手権優勝12回、アジア大会５連覇、オリンピック代表に４度選出。1984年のオリンピックロサンゼルス大会では日本選手団旗手を務める。たゆまぬ努力を続けて、39歳という年齢でなお日本記録を更新した。指導者としてオリンピックアテネ大会男子ハンマー投げ金メダリストとなった息子の室伏広治を始め幾多の名選手を育成した。中京大学陸上競技部監督・オリンピックアテネ大会日本選手団ヘッドコーチなどを歴任。

註19）ハンマー投げ日本記録84メートル86＜2003（平成15）年＞保持者。2001（平成13）年・世界陸上エドモントン大会銀メダル、2011（平成23）年・世界陸上大邱大会金メダル、2012（平成24）年のオリンピックロンドン大会で銅メダル獲得。2020（令和2）年東京オリンピック・パラリンピック組織委員会スポーツディレクター・理事。スポーツ庁 オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議委員。

引用・参考文献

1）中京大学ホームページ：https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2017/05/011729.html（2019年5月4日検索）.

2）中京大学体育学部・スポーツ科学部（2011）中京大学体育学部五十周年記念誌、コームラ：p. 23-26.

3）福岡大学同窓会有信会（2013）福岡大学同窓会紙　有信　第143号（2013年12月発行）、正光印刷：1.

4）上掲1）に同じ.

5）福岡大学五十年史編集委員会（1988）福岡大学五十年史別巻、凸版印刷：pp. 361-362.

6）福岡大学75年史編纂委員会（2009）福岡大学75年の歩み、正光印刷：p. 303.

7）日刊スポーツ（2018）東京五輪・パラリンピック300回連載、日本記録55年間独占　ハンマー３鉄人の哲学、2018年10月11日10時10分（Web版）：、https://www.nikkansports.com/olympic/column/edition/news/201810100000707.html（2018年11月25日

検索）.

8） 笹川スポーツ財団（2013）スポーツ 歴史の検証、第20回　世界が認めた“アジアの鉄人” 室伏重信：pp. 1-13.（PDF版）www.ssf.or.jp/ssf/tabid/813/pdid/220/Default.aspx（2018年11月25日検索）.

9） スポーツ庁・オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて」最終報告：p. 17.（PDF版）http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf（2017年5月18日検索）.

10）前掲1）に同じ.

11）早稲田スポーツミュージアムホームページ：https://www.waseda.jp/culture/about/facilities/spomu/（2019年10月8日検索）.

12）前掲11）に同じ.